慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小麦農場からりんご園へ : 19世紀後半・ アメリカ東部の都市近郊農業
Sub Title	Growth of h orticulture in New York, 1850–1900
Author	岡田, 泰男(Okada, Yasuo)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2006
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.1 (2006. 4) ,p.1- 27
JaLC DOI	10.14991/001.20060401-0001
Abstract	19世紀後半, アメリカ東部農業は西部の競争や地力の低下により転換期を迎えていた。農民の中には西部あるいは都市へ移住するものも多かったが, ここでは新たに成長しつつあった都市市場を目指して, 小麦生産から園芸農業へと農業経営を変換させた二ューヨーク州の一農場の例を紹介する。それによって, 従来保守的とみなされていた東部農業の中にも進取的側面があったことの例証としたい。
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20060401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」99 巻 1 号（2006 年 4 月）

小麦農場からりんご園へ

——19 世紀後半・アメリカ東部の都市近郊農業——

岡　田　泰　男

要　　旨

19 世紀後半，アメリカ東部農業は西部の競争や地力の低下により転換期を迎えていた。農民の中には西部あるいは都市へ移住するものも多かったが，ここでは新たに成長しつつあった都市市場を目指して，小麦生産から園芸農業へと農業経営を変換させたニューヨーク州の一農場の例を紹介する。それによって，従来保守的とみなされていた東部農業の中にも進取的側面があったことの例証としたい。

キーワード

アメリカ，ニューヨーク州，都市近郊農業，園芸農家，果実生産

はじめに

ニューヨーク州イサカにあるコーネル大学オーリン図書館の古文書室に，子供が落書きした史料がある。「ハロルド・ヒッチングズは，ここに書いてある字が読めない」とあり，10 歳と自分の年齢が記してある。続いて「エドナ・ヒッチングズも読めない。これを書いた人は字が下手だ」と女の子が書いている。ふすまの裏張りから大切な史料が発見されたり，落書きそれ自体が重要な史料だったりすることもあるが，この場合，落書きされたのは農民の勘定帖で，1808 年からのものである。「字が下手」な記入者は，ニューヨーク州オノンデイガ郡（Onondaga）のジョン・ヒッチングズ（John Hitchings）という農民で，10 歳のハロルドは，その曽孫である。古い勘定帖は，子供の落書き帖にされてしまったらしいが，ニューヨーク州の場合，19 世紀初期の農民の勘定帖はあまり残っていない。これは，同州クーパーズタウンにあるニューヨーク州歴史協会の図書館の史料カタログを調べてみても分かる。とりわけ，ヒッチングズ家は，同じオノンデイガ郡で 20 世紀に至るまで 100 年以上，農業を続けており，その記録がきちんと残っていれば非常に貴重である。というのも，アメリカ東部の同じ地域で 19 世紀を通じて農場を経営していることが珍しい，むしろ西部へ移住してしまったり，都会へ移ってしまったりする例が多いからである。現にニューヨーク州では，後年，1 世紀以上続いている農場を「センチュリー・ファーム」として表彰したが，その対象と

なった農場の数は限られたものであった。[1]

さて，最初の勘定帖を残したジョン・ヒッチングズは，オノンデイガ郡の郷土史の記述によれば，1800年頃，コネチカット州から移住した同郡の初期の開拓者であったという。[2] 1808年から1830年代までの勘定帖は，断片的で，農場経営の状態を再構成することができないが，小麦，オート麦，とうもろこしなどを栽培していたらしい。羊や豚も飼育していた。1850年代に入ると，新しい字体によって記入された勘定帖が残っている。これはジョンの息子のホレイス（Horace Hitchings）によるもので，1854年4月に最初の記入がある。作物や労働者雇用の記録があり，小麦中心の農場であったことが分かる。1870年にホレイスは死去し，未亡人と4人の子供が残される。長女はまだ14歳である。農場の仕事は，未亡人エルヴィラ（Elvira）の実弟のホランド・リッチ（Holland Rich）が引受けるが，勘定帖は未亡人が記入し，収穫は折半している。当初は小麦や大麦が中心であるが，畜産（羊や豚）や酪農（バター）にも従事し，後者の比重が増してくる。

1880年，ホランド・リッチは農場経営から離れ，未亡人と息子たちが経営にあたる。長男ジョン（John）は18歳，次男グラント（Grant）は17歳であるが，多分，農作業の手伝いは何年か経験しており，自立できる見込みがあったのであろう。グラントの方が経営の才があったらしく，1884年中頃からは彼が勘定帖を記入している。すでに70年代から，りんごの栽培を始めていたが，グラントは果物あるいは野菜に力を入れるようになる。そして1890年代にはヒッチングズ農場は，じゃがいも，えんどう豆，りんご，いちごなどを主要作物とする農場に変化する。ニューヨーク州の農業は，19世紀中葉には小麦，大麦などの穀作を中心としていたが，地力の低下，西部の競争，都市の成長などの要因により，酪農あるいは園芸農業へ移っていった。こうした変化，言葉をかえれば，都市近郊農業の成立を，子供のいたずら書きのある勘定帖を中心にたどってみたい。[3]

I. ニューヨーク州ヒッチングズ農場

19世紀後半のアメリカ農業史研究の重点は，西部農業の発展におかれ，東部はあまり研究者の興味をひかない。ニューイングランド農村はすでに没落し，かつては豊かな穀作地域であったニューヨーク州も，南北戦争後は全盛期を過ぎてしまった。最近，関心を集めている市場革命は19世紀前半の話であり，以前多数の研究がなされた農民運動は西部もしくは南部が中心である。もちろん，穀

---

(1) Hitchings Papers, Department of Manuscripts and University Archives, Cornell University. なお，Century Farm は，ニューヨーク州農業協会が1937年以来選定している。その条件は，同じ家族によって100年以上経営されている農場である。この行事は今日も継続して行われている。詳しくは New York State Agricultural Society のホームページを参照のこと。

(2) Dwight H. Bruce, ed.,*Onondaga's Centennial* (Boston, 1896) Vol.2, p.310.

(3) Hitchings Papers (以下，HP と略記する。) なお，I, II, III, IV 節は主にこの史料によっているので，特に必要な場合以外は注記しない。

作から都市近郊農業へという東部農業の変化の大筋は，すでに分かっている。「ジェネシー小麦粉」という，いわばブランド名で知られたニューヨーク州西部の小麦地帯が，病虫害や西部の競争により多角化していったことは，マクノールの古典的研究にも記されている。しかし，多角化の実態についての詳細な研究は，ほとんどおこなわれていない。例外的に酪農業についての研究は，二，三あるが，この場合女性の果す役割が大きいため，農業史よりは女性史的関心が強く働いている。そして，農業史そのものに興味を抱く歴史家が減少したこともあって，小麦生産衰退後の東部農業は研究者にも放棄されたままである(4)。

先にニューヨーク州の小麦地域のある農村をとり上げ，小麦生産の減少に対して，農民がいかに対応したかを調べてみた。そこでは酪農や畜産への変化は，なかなか困難で，せいぜいオート麦などを増やし，穀作を中心とする農業を続けていた。これは農場の大小，農場主の年齢，その村に定着している年月などにあまり関係なく，ほとんどすべての農民について見られた。ただし，その研究は1850年と60年の状況を扱ったのみであるので，ここでは19世紀末まで時期を延ばし，個別の農場に対象をしぼった。また，前にとり上げたロダイという村は，近くに大きな都市はなかったが，今回はシラキュースという都市に近く，荷馬車で農産物を販売に行けるような地域の農場を扱う。なお，苗木生産をおこなうロチェスター近郊の農場，果物をニューヨーク市へ出荷した農場についても後段でふれることとする。いわば都市近郊という地の利を十分に生かせるような農場を選んだわけであるが，都市化が進行したアメリカ東部においては，こうした農場は例外的存在ではなかった。果物や野菜，あるいはミルクやバターの生産こそ，東部の農民が西部の競争に対抗して生き残れる道だったからである(5)。

ヒッチングズ農場の創設者であったジョンの時代については，すでに記したように農場規模も経営の状態もはっきりしない。小麦，オート麦，とうもろこしなどを栽培し，羊や豚を飼育していたことが分かる程度である。もっとも，6ヵ月あるいは7ヵ月の期限で労働者を雇用した記録があるから，零細農場とはいえないであろう。その息子のホレイスは1855年に結婚するが，前年から農場経営を受け継ぎ，穀物の他，冬場に材木などを販売した。55年にW. ブリッチャーという労働者を7ヵ月，翌年にも3名を6〜10ヵ月雇用している。賃金は月あたり10〜12ドルであるが，収穫期の労働力確保のため，必要であったのかもしれない。50年代中葉にはクリミア戦争などの影響もあり，通常1ブッシェル1ドルの小麦価格が，2ドルまで上昇したこともあった。いったん価格は元

(4) Neil McNall, *An Agricultural History of the Genesee Valley, 1790–1860* (Philadelphia, 1952); Sally McMurry, *Transforming Rural Life: Dairying Families and Agricultural Change, 1820–1885* (Baltimore, 1995). なお農業史の凋落については，次の対談を見よ。"*Agricultural History* Talks to Gavin Wright," *Agricultural History* 77 (2003), 553–556; "*Agricultural History* Talks to Jeremy Atack," *Agricultural History* 78 (2004), 413–416.

(5) 岡田泰男「ニューヨーク州西部農業の変化—19世紀中葉セネカ郡」『三田学会雑誌』94巻2号（2001年）。

に戻るが，60年代には南北戦争のため，再び上昇し，1864年の9月に，ホレイスは1ブッシェル2ドル50セントで小麦を売却している。その前年の小麦販売量は700ブッシェルであったから，この年も同水準とすれば，小麦のみで1,700ドル以上の収入となる。地力減退や病虫害の問題があったにせよ，小麦中心の農業から離れられない状況が続いたといえよう。

1867年4月，ホレイスは109エーカーの土地を計12,250ドルで売却し，新たに190エーカーの土地を18,395ドルで購入した。ホレイスは冬の間は学校で教えていたというが，農場を移った理由は，郷土史によれば，子供たちのため，学校の近くに引越しをしたとのことである。この移動と拡大のため，同年，シラキューズ貯蓄銀行から5,000ドルの借入れをしている。上記の土地取引では，差引き6,145ドルの赤字になっているので，その分を銀行から借りたのであろう。ところで，農場経営の拡大に踏み切って3年目の1870年にホレイスは死んでしまう。この年の生産物はホレイスの経営の最後のものであるが，売上高から見ると，小麦が1,188ドル（1,032ブッシェル）で1位，大麦988ドル（1,029ブッシェル），とうもろこし572ドル（673ブッシェル），豚2頭と豚肉（1,700ポンド）が213ドル，他にオート麦，干草，えんどう豆などで，総額は3,069ドルであった。小麦はコンクリン兄弟，とうもろこしはスティーブン・マーサーという仲買人に売却されているが，これらはすべて死後の勘定であり，遺産（Estate）と記してある(6)。

ホレイスが死亡した際，いったんは農場経営を継続することは，あきらめられたらしく，財産の売り立てがおこなわれた。この競売記録は，当時，中規模の農場を持っていた農民が，いかなる農機具や道具を所有していたかを示してくれる貴重な史料である。なお，土地，建物，家具などは競売に含まれていない。ヒッチングズ一家が，とりあえず同じ家で暮らしていたためであろう。なお，作物や家畜は未亡人の財産として別に売却されているが，この分についても記録がある(7)。

まず農機具として，収穫機，草刈り機，精選機（唐箕），馬鍬，耕耘機，深耕用の鋤，草刈り鎌，収穫用鎌（Scythe, Cradle），くま手（Rake, Fork），鋤と付属用具，鍬，シャベル，干草ナイフ，とうもろこし収穫用具，ふるい，圧土用ローラーなどがあり，合計211ドル29セントである。1870年になっても手で収穫する道具が残っているのは，傾斜地などで使用されたものであろう。次に荷馬車やそりなど，運搬用具が多くある。材木用荷馬車が2台と付属用具，軽荷馬車（Democrat Wagon），荷馬車などに加え，二連ぞり（Bobs）2台，そり（Sled）2台，二人用そり（Two Seated Sleigh）など，計359ドル80セント。馬具，家畜用具として，馬具，くびき，鞍，チェーン，首輪，二頭立て用馬具（Double Harness），蹄鉄など，計60ドル31セント。さらに，大工用具，金具，工具類として，のこぎり各種（Cross cut saw, Sitting saw, Buck saw, Fine saw），金てこ，ハンマー，つるはし，ロープと滑車，くさび，斧，丁番とやすり，金床，切削台，ふいご，ペンチ，のみ，切断用具，

(6) W. W. Clayton, *History of Onondaga County, N.Y.* (Syracuse, 1878), p.274；"The Estate of Horace Hitchings," HP.

(7) "Account of Sale of Personal Property of Horace Hitchings deceased, 1870," HP.

ねじ製造用工具，万力，作業台，古鉄，棒，留め金，はさみ，窓わく，管，銃身など，計 60 ドル 86 セント。その他として，メイプルシロップ用桶，ケロシン油用樽，穀物用の保存箱，はかりと升，皮製のネットが計 16 ドル 2 セント，総合計は 708 ドル 46 セントであった。冬は寒さの厳しいニューヨーク州の農場を経営し，生活してゆくために，どんな品物が必要であったかが分かる。

次に未亡人の財産として売却されたものと生育中の作物の評価額が残されている。売却された品物は，穀物用の袋，豚肉用の樽，空樽，食用酢の樽，石けん箱，ケトル，バスケット，樫のベンチ，はしご，脱穀用からざお，かんな，きり，巣箱の蜜蜂，木の杭と柱など計 84 ドル 43 セントであるが，この中には必ずしも主婦の所有物とは思えぬものもある。納屋ではなく，台所においてあった品物かもしれない。さらに，オート麦 272 ブッシェル，とうもろこし 80 ブッシェル，干草 4 トン，りんご 40 ブッシェルと，生育中の小麦も含め農作物の価格が 505 ドル 74 セント，灰色の馬と白色の牛，豚 4 頭の家畜が 311 ドル 10 セント，湿地 1 エーカーにある立木が 20 ドル，合計 921 ドル 27 セントとなっている。なお，オート麦などはすべて前年の収穫物であり，生育中の小麦も前年にまかれたものだが，先に記したホレイスの遺産（3,069 ドル）との関係は一寸はっきりしない。遺産に関する清算が終わるのは，1871 年 4 月になってからのことであり，上記の小麦の評価額と，実際に収穫され売却された価格とは，必ずしも一致しないからである。農作物に関しては，先に遺産として示したものの方が，最終的な数字といえる。(8)

さて，いったんは農場経営をやめると決意し，農機具類の処分もなされたが，未亡人の両親は同じ村に住んでおり，両親と共に 2 人の弟（34 歳，26 歳），2 人の妹（30 歳，24 歳）もいた。未亡人エルヴィラは 40 歳で，14 歳を頭に 4 人の子供がいる。多分，農場を売却して他所へ移住するよりは，親族や知り合いのいるこの村に住み続けることを，エルヴィラは望んだと思われる。都合の良いことに，彼女の弟たちは未婚で，自分の農場を持っているわけではなかった。こうして，上の弟のホランド・リッチがヒッチングズ農場の経営を引受けることになったのであろう。先の競売の際に，荷馬車やそりなどをホランド・リッチが購入しており，一応の了解がなされていたのかもしれない。1870 年のセンサスを見ると，ヒッチングズ家にはエルヴィラ，4 人の子供，ホランド・リッチの他，住込みの農業労働者 2 人と，家事奉公人 1 人がいた。労働者の 1 人はイギリス生れ（30 歳），もう 1 人はプロシャ生れ（18 歳）で，家事奉公人はプロシャ生れの労働者の姉（20 歳）と思われる。ホレイスの在命中も住込みの労働者を雇っていたが，ホランド・リッチ 1 人では，農場の運営は困難であったろう。また，子供たちが幼いので，エルヴィラは手助けが必要であったに違いない。(9)

この年以降，勘定帖はすべてそろっており，エルヴィラの几帳面な字体で記入がなされている。すでに述べた通り，1880 年まではホランド・リッチが農場の仕事をまかされ，収入の半分は彼のもの

---

(8) “Account of Private Sale at Appraisal, 1870,” HP.

(9) U.S. Census (Manuscript Schedules) Population, 1870, Onondaga County, N.Y.

となった。その後はヒッチングズ家の息子たちが農場経営にあたり，勘定帖の記入もやがて次男のグラントによってなされる。1891 年，グラントは結婚するが，前年，ヒッチングズ農場は，グラントと兄のジョン，未婚の姉のメアリの間で分割されており，グラントは建物と 65 エーカーの土地を受け取った。これ以後，勘定帖はグラントの持ち分についてのものとなる。次節の表 1 で 1870 年以降の農場収入を示すが，1889 年が約 2,200 ドルで，1890 年が約 1,100 ドルと半減しているのは，上記の理由による。長女のメアリは未亡人となった母親の家事を手伝ったりして，家に残っていたのであろう。グラントの記録には自分の農場と共に「メアリの農場」という記入があるので，姉の土地はグラントが耕作を引き受けていたのかもしれない。1899 年，グラントの農場は 157 エーカーで，所有地が 123 エーカー，借地 34 エーカーとなっている。メアリの土地は所有地の中に含まれているものと思われる。(10)

以上，ヒッチングズ農場の歴史の大略を記したので，次に 1870 年以降の小麦農場から園芸農家への変化をたどろう。

II. 穀作農場から園芸農場への変化

19 世紀半ばから後半にかけて，ニューヨーク州中部の穀作農家の規模は，ほぼ 100～200 エーカーであったから，ヒッチングズ農場は平均的と考えてよい。この程度の農場の年々の収入，すなわち農産物の売上高は，どれくらいのものであったろうか。1870 年から 1900 年までのヒッチングズ農場の収入の変化を表 1 に示す。

ホレイス・ヒッチングズの死去した 1870 年については，遺産目録によったが，その次の年からは勘定帖によっている。1870 年代，ホランド・リッチが経営していた時期，1880 年代，ジョンとグラントの 2 人の息子が経営していた時期，そして，1890 年代のグラントの農場の時期と三つの時期に分けられる。先ずホランド・リッチが引継いだ最初の時期，1871 年には 2,900 ドルとホレイスの売上げ水準を維持しているが，その後は 1,800～2,500 ドルと収入が下落している。これはホレイスの時代に生産の支柱であった小麦作の低迷によるものと思われる。小麦の売却量は，1871 年には 822 ブッシェルであったが，1875 年には 458，1879 年には 310 となっている。ブッシェルあたりの価格も 60 年代には 2 ドル 50 セントという時もあったが，1871 年には 1 ドル 50，75 年は 1 ドル 56，79 年は 1 ドル 35 という具合であった。小麦に代わるものとして，大麦，オート麦，クローバー種子，さらに豚や羊といった畜産に目を向けたが，十分な収入を確保できたわけではない。1875 年，小麦からは 720 ドル，大麦とクローバー種子を合わせて 296 ドル，豚肉，羊毛，子羊により 306 ドルの収入があったが，他を合計してもまだ小麦に及ばない。ただ 1879 年になると，小麦収入 418 ド

(10) Record, 1899, HP. これはセンサスのため記入したもの。

表1　ヒッチングズ農場売上高

年度	売上高（ドル）	年度	売上高（ドル）
1870	1,442	1886	1,909
1871	2,909	1887	1,729
1872	1,826	1888	2,169
1873	2,513	1889	2,224
1874	2,237	1890	1,163
1875	1,789	1891	1,101
1876	2,187	1892	1,396
1877	1,854	1893	1,893
1878	2,320	1894	2,014
1879	1,492	1895	2,076
1880	925	1896	1,130
1881	1,664	1897	1,406
1882	2,816	1898	1,979
1883	1,646	1899	2,324
1884	1,818	1900	2,049
1885	1,854		

出所　Hichings Papers

ルに対し，畜産物が 395 ドルと，ほぼ拮抗している。また，りんご 312 ブッシェル，58 ドルという収入は，将来の方向を示すものともいえる。もちろん，この地域ではどこの農家にもりんごの樹は植えられており，ヒッチングズ農場でもホレイスの時代から，多少の収穫はあった。しかし農場経営の中で重要な位置をしめるようになるのは，まだ先の話である。

1880 年の収入が 925 ドルに落ちているのは，実は帳簿に欠けた部分があるためで，ホランド・リッチがやめたことと関係があるかもしれない。彼が農場を離れても，2 人の息子がおり，またエドワード・マクヴォイという労働者が年間を通じて雇用されていたので，人手不足ではなかった。1880 年代の収入は，82 年のみ 2,800 ドルを越えているが，ほぼ 2,000 ドル程度である。勘定帖で支出の方を見ると 1881 年に種まき機（92 ドル），収穫機（100 ドル），精選機（15 ドル）を購入しているので，穀物生産を継続する意向が読みとれる。実際，小麦は毎年 400 ブッシェル程度，大麦やオート麦を 500〜1,000 ブッシェル生産した。また，1870 年代から力を入れ始めていた畜産の拡大も考えたらしく，1881 年に 81 頭の子羊（250 ドル），1882 年には 10 頭の牛（154 ドル）を購入している。これらは育成して売却されたもので，売上記録を見ると，82 年に羊 46 頭と子羊 127 頭（計 798 ドル），83 年には羊 29 頭と子羊 21 頭（270 ドル），牛，子牛（147 ドル）などとなっている。(11)

ニューヨーク州の場合，穀作と畜産を組合わせた複合経営から，畜産へ力点を移す際には，牛や羊の育成よりも酪農へ特化してゆく傾向が見られた。これは牛などの飼育や飼料作物の生産では西部との競争にかなうはずもなかったためである。酪農業のうち，チーズの生産は 19 世紀中葉からす

（11）Account Books, HP.

でに，いわゆる工場生産の方式がとられ，個々の農家は牛乳を工場に供給していた。バターは個別に生産され売却されるのが普通で，ヒッチングズ農場でもバターの生産がなされていた。1880 年には 400 ポンド程度であったが，85 年には 1,830 ポンド(398 ドル)と，売上高で小麦や大麦をしのいでいる。ただ，この農場には，もう一つ，りんごや野菜など園芸作物という柱も育ちつつあり，同じ 85 年，りんご 312 ブッシェルからの収入は 155 ドルとなっている。そして，この年には，りんごの苗木，キング種 10 本，グリーニング種 15 本が，果樹園に植えられ，以後その数は増えてゆく。未亡人と 2 人の若い息子にとって，1880 年代は農場経営をいかなる方向へ向かわせるべきか，試行錯誤の時期であったといえる。もっとも，1870 年代にはホランド・リッチと折半していた収入が，全額ヒッチングズ家のものとなったから，年 2,000 ドル程度の収入で，家計はそう苦しくなかったであろう。1881 年，82 年に新しい農機具や家畜を購入したのも，そうした状況を示している。(12)

当時，農村の若者の間で，討論会もしくは弁論会がしばしば開かれ，知的な娯楽あるいは社交の機会として人気があった。「飲酒の害」とか，「移民の禁止」とかについて，討論するのであるが，1887 年 4 月 8 日に，サウス・オノンデイガの教会で開かれた会では「若者にとって東部の方が西部より魅力がある」という題で，グラント・ヒッチングズは，これに反対，すなわち西部の方が魅力があるという立場から一席論じた。彼は先ず「この蒸気と電信と電気の時代に，21 歳になった若者がこんなにゆっくりした，活気のない，20 年も時代から遅れているような場所に留まるのは不可能だ」という。そして西部農業の有利さに話を進め「西部では，1 人の人間が 1 年間に，東部の 10 年分の穀物を生産する。われわれが 5 エーカーのとうもろこしを育てるのと同じに，50 エーカーを育てる。こちらで 1 ブッシェルをつくる費用で 5 ブッシェルをつくる」と述べ，その理由は土地が安く，平坦であり，東部のように石ころだらけでもないので，農業機械が利用しやすいからだという。また，作物を販売する際も，ここでは山坂が多いので少しずつしか運べないが，土地の平らな西部では沢山が運べる。さらに「東部の農民は古いやり方に執着し，パパのやっていたことを真似て，新しい改良に 1 ドルも使わない」と述べ，「西部の人間は，故郷を離れる勇気を持ち，パパに頼るのではなく，自分自身に頼るセルフ・メイド・マンなのだ」と，伝統的な東部の人間の欠点を突いている。もちろん，これは議論のための議論というところもあり，グラント自身は東部に留ったのではあるが，西部農業の有利さと，東部農業の革新の必要を実感していたことは確かであろう。(13)

さて，1890 年の収入が前年のそれから半減しているのは，すでに述べた通り農場の分割の結果である。以後の表 1 の数字はグラントの農場の部分のみを示している。グラントの農場経営が上手くいったことは，収入が次第に増加していった事実から分かる。中には 1896，97 年のように収入の少なかった年もあるが，ほぼ 2,000 ドル前後の売上げがあった。グラントの時代になって大きく変

---

(12) Account Books, HP.

(13) “Debate, Given at South Onondaga at the M.E Church, April 8, 1887,” HP.

化した点は，じゃがいも，えんどう豆，いちごなどの生産が増えたことであって，りんご生産に加え，都市近郊型の農場になったといえる。たとえば 1895 年，じゃがいも 2,500 ブッシェル（820 ドル），えんどう豆 530 ブッシェル（534 ドル），りんご 1,000 ブッシェル（370 ドル）が，収入の上位 3 位をしめた。小麦はまだ 130 ブッシェル売却しているが，それからの収入は 90 ドルにすぎない。

同じ 1895 年，グラントの農場の資産目録がつくられている。これは保険を掛けるために作成されたものらしいが，そこに示された農機具類を見ると，1870 年のホレイスの時代との差が明らかである。まず，鋤，馬鍬，耕耘機，刈取機，結束機，草刈り機，精選機などは変らずにあるが，馬鍬や耕耘機の数と種類が多くなっている。散水器，噴霧器，除草具，畝立て具，マーカー，じゃがいも用覆土機，じゃがいも掘り機，牧草用種まき機などは，すべて新顔である。荷馬車などが多いのは以前と同じで，幌つき，幌なし馬車，材木用荷馬車，軽荷馬車，荷車などがある。はしご，木製の棚，果物用の木箱（crate）350 個などという項目も園芸農家の特徴を示している。家畜として，馬 4 頭，牛 2 頭，子牛 1 頭，それに，にわとり 120 羽を飼っていた。この時期に掛けた保険には，家屋や家財なども入っているが，当時の農民の財産を示す一例として，評価額を記しておく。

家屋	2,000 ドル
納屋及び地下室	2,000
家財道具	400
衣服，寝具	150
銀器，書物，絵画	100
家族用食料	100
干草，穀物	600
農機具	200
馬車，そり，馬具類	250
馬	150
牛	50
計	6,000 ドル

これに対する保険金は 3 年分で 45 ドルであった。なお，農場（土地）は同年 5,000 ドルとされている。(14)

ここで，1870 年から 1900 年にかけての変化を示すため，売上高中，上位 3 位をしめる生産物と売上高，それが総売上高の中でしめる比重を，5 年毎にとってみよう。なお，1870 年はホレイス・ヒッチングズの遺産勘定であり，1880 年の代りに 1881 年を示したのは，前年度の記録が不完全な

(14) “Inventory, February 1, 1895,” HP.

表２　主要作物の変化

年度	主要作物 （上位３種類）	A 主要作物売上高	B 総売上高	A/B %
1870	小麦，大麦 とうもろこし	$2,749	$3,069	89.5
1875	小麦，豚肉，大麦	1,123	1,789	62.8
1881	大麦，オート麦，豚肉	713	1,665	42.8
1885	バター，小麦，大麦	1,105	1,855	59.6
1890	乾草，バター じゃがいも	713	1,163	61.3
1895	じゃがいも えんどう豆，りんご	1,727	2,077	83.1
1900	じゃがいも，りんご えんどう豆	1,181	2,050	57.6

出所　Hitchings Papers

ためである。

表２はヒッチングズ農場が，穀作中心の経営から，畜産，酪農を含む複合経営を経て，園芸農業へたどりつく過程を明らかに示している。すなわち，小麦，大麦，とうもろこしなどが，総売上高の90パーセントをしめるような経営から，豚肉やバターが売上高中，上位３位に顔を出すような経営に移行し，やがて，じゃがいも，りんご，えんどう豆などを主要作物とする都市近郊農業に変化していったのである。なお，1900年，売上高の４位をしめたのは，いちごであって，それをも含めると上位の４種の作物からの収入は，総売上高の74.5パーセントをしめた。新作物の導入に伴い，農場で使用する農機具の種類が変っていったことは見た通りであるが，このような農業の特化は，農作業の内容，雇用労働の利用，そして農作物の販売方法にも，当然いろいろな変化をもたらす。以下，その点について検討する。

III.　園芸作物の生産

アメリカ東部の農民の日記には，First Robinという言葉がしばしば出てくる。うぐいすの初音に近い感じなのかもしれないが，ロビンが来ると，それは春の農作業を始める合図であって，冬の間，雪に覆われていた畑にすきを入れたりする。もっとも穀作中心の農家の場合，この時期はまだ準備段階であって，本格的には５月にとうもろこしを植え，６月以降，草刈り，そして収穫と農繁期を迎えることとなる。グラント・ヒッチングズの農場にロビンが来るのは，早い年は３月12日，遅い年は３月下旬か，もう少し後になるが，園芸農家では，もうその頃から忙しくなる。３月20日過ぎから，えんどう豆の種まき，りんごの木の手入れをする。またクローバーやティモシーの種をまく。４月に入ると，えんどう豆に加えて，じゃがいもを植え，いちご畑に床をつくって，いちごを植える。

レタスやたまねぎ，ビーツやかぶの種もまく。また，りんごの木に虫よけのスプレーをする。5 月に入ると作物が芽を出しはじめるので，えんどう豆の畑では，種まき，中耕除草，早生の収穫が平行して進む。じゃがいもの植付け，除草があり，とうもろこしを植えたり，果樹園のスプレーも続く。さらに，いちごの収穫も始まる。このように小麦農場よりは，ずっと早くから繁忙期が始まる。

えんどう豆の出荷は 6 月に入ると本格化し，いちごも同様である。じゃがいもの中耕除草もある。グラントは小麦の生産を中止してしまったわけではないので，7 月，8 月は収穫，脱穀，運搬などで大変忙しい。小麦生産を続けている理由は，旧習にとらわれているからではない。えんどう豆やじゃがいもは，同じ畑に作り続けていると，連作障害をおこし，発芽が阻害されたり，根ぐされになったりするためであった。したがって，9 月には冬小麦がまかれるが，その際，「えんどう豆畑に」とか「じゃがいも畑に」とか記入があり，輪作がおこなわれていることが分かる。1896 年について見ると，作付面積はじゃがいも 10 エーカー，えんどう豆 9 エーカー，いちご 1.25 エーカーで，これにりんご園の 5 エーカーを加えた分を，グラントは勘定帖の中で輪作地（Rotation Acre）と名付けていた。小麦について，96 年は不明だが，翌 97 年は 8.5 エーカー，98 年は 14.25 エーカーで，勘定帖ではこれも輪作地に含まれている。りんご園が輪作地に入っているのは奇妙だが，この名は主要産物の作付地というほどの意味であろう。なお小麦の収穫と秋まき小麦の播種で 1 年の農作業が終了するわけではなく，11 月には，りんごの苗木植付けがおこなわれた。酪農農家の年間作業日数が多いことはいうまでもないが，園芸農家も負けず劣らず忙しかった。(15)

さて，グラントの作っていた各種の作物の中で，えんどう豆とりんごの生産について，少し詳しく検討しよう。先ずえんどう豆について見る。すでに記したように，えんどう豆は 3 月のうちに種まきが始まる。生育は早く，1893 年の例を見ると，4 月 5 日にまかれたアラスカ種のえんどう豆は，5 月 1 日には 1/4 インチくらいの芽を出し，5 月 16 日には 5 インチまで伸びた。5 月 31 日には花が咲き，6 月 6 日には，さやがつき，6 月 13 日には，もう収穫できるほどに大きくなった。4 月 10 日に種をまいたホースフォード種も，5 月 6 日には芽を出し，6 月 9 日に花が開き，6 月 29 日には摘んでよいくらいになっている。したがって，6 月中旬には最初の収穫と出荷がおこなわれるが，何回も種がまかれ，収穫がある。1895 年のテレフォン種の場合，次の通りであった。

	播種	収穫
1 回目	4 月 17 日	6 月 22 日
2 回目	4 月 25 日	7 月 3 日
3 回目	5 月 7 日	7 月 12 日
4 回目	5 月 17 日	7 月 19 日

(15) Diary; Account Books, HP.

5回目　　5月28日　7月26日

大体，1エーカーに2ブッシェルくらいの種をまき，80〜90ブッシェル程度の収穫があるが，出荷の回数は多く，期間も長い。1891年には最初の出荷が6月27日，最後は9月2日，92年には6月17日に始まり，8月3日までといった具合である。もっとも，えんどう豆の価格は時期が早ければ早いほど高く売れる。1895年には6月8日から8月3日まで計10回の出荷がおこなわれたが，6月8日の2ブッシェルの分は，ブッシェルあたり2ドルで売れた。アメリカにも初物に目のない客がいたのであろう。同月中旬以降は10ブッシェルくらいずつ出荷し，1ドル25セントとなる。7月に入ると1回の出荷は40ブッシェルほどに増えるが，価格は7月3日が1ドル，7月12日は85セント，7月18日以降は75セントと下がる。えんどう豆には，いろいろな品種があり，グラントも各種のものを育てていたが，その名を見ると，Advancer, Telephone, Telegraphなどと，いかにも早目に収穫ができそうな名前が並んでいる。野菜の種子や苗木を売る業者が頭をしぼったのであろう。(16)

グラントは，えんどう豆の生産にあたり，品種を選ぶのみではなく，さまざまな実験を試みている。種をまく前の処理として，えんどう豆を隙間のない樽につめ，亜硫酸ソーダを入れた皿をのせ，ふたをして毛布で覆い，24時間，暗いところにおく，といったことをしてみた。肥料については，アラスカ種のえんどう豆を何列かまき，それぞれに，硫酸カリ，硝酸ソーダ，塩酸カリ，石膏，サウス・カロライナ・ロック，塩，厩肥をほどこし，肥料を与えない列もつくるという実験をした。同様な実験は，じゃがいもについてもおこなわれたが，何年かの試行の後，「肥沃度を保つための最も安上りな方法」というメモを残している。それによれば「今の作物の価格では化学肥料を購入することはできない」として，次の方法が良いとする。一つは穀物，クローバー，野菜という3年間の輪作であり，もう一つは，すべての作物を8月1日までに収穫し，その後，軽く厩肥をまいてすき込み，さらに1ヵ月ほどたってから耕して，土壌の水分を保ち，バクテリアを増やすようにする方法である。「肥料を購入するより，バクテリアにまかす方が安上りだ」というのが結論であり，現にグラントの農場での肥料への支出は，1895年には47ドル，97年には45ドルであったが，98年以降はゼロとなっている。有機農法の先駆けといえるかもしれない。(17)

実は，りんごの栽培においても，グラントは独特な方法を採用していた。先に記した通り，ヒッチングズ農場ではホレイスの時代からりんごを栽培していた。未亡人と2人の息子で経営していた1880年代から，年々300ブッシェル程度を生産し，85年からは，新たにいろいろな品種のりんごを植えている。とくにグラントが独立して経営するようになった1890年代からは，一層熱が入る。

---

(16) Diary; Account Books, HP.

(17) “Experiment with Peas” (n.d.); “The Cheapest Way to Maintain Fertility” (n.d.), HP.

91年に，ボールドウィン種とグラヴェンスティン種を計25本，93年にはそれに加えスパイとキング，グリーニングなど計160本，94年にスパイ120本，95年にラセット，ジョナサン，アレキサンダー，スピッツェンバーグなど150本といった具合で，1899年には隣接した林地の立木を伐りはらい，600本の苗木を6人がかりで植えている。グラントの植えた品種の中には，耳なれぬものもあるが，今日もなお栽培されている品種もある。さて，グラントが独特な方法で，しかも立派なりんごを育てていたことは，当時の農業雑誌『ルーラル・ニューヨーカー』の記事からも分かる。

同誌の1901年9月28日号には，ニューヨーク州の農業共進会での果物の展示についての記事があり，「サウス・オノンデイガのグラント・ヒッチングズはりんごを出品したが，品種の多さ，色づき，品質の点で，これほど見事なものを見たのは初めてだ。ヒッチングズ氏は新しい栽培法を提唱しているが，この結果から見て，りんご生産者はその方法に関心を持つべきだ」と記している。そして，同年11月9日号には，ヒッチングズ農場の訪問記が第1面に掲載されている。同誌の記者はジュネーヴァ農業試験場のビーチ教授に同行して行った。「ヒッチングズ氏の独特な点は草地（sod）に苗木を植えることだ。中耕はせず，最初の10年は，木の間と周りの草を刈り，その草で土壌を覆う。整枝や剪定は，必要がない限りおこなわない。これは成長を早めるようだ。11年目の木は12から15フィートの高さになり，1本18ブッシェルほどの実をつける。その4分の3は地面で拾う」とある。また，6年目くらいから実をつける木もあるとの話も紹介され，「ビーチ教授は，自分自身で見るまで，このりんご園の話を信じなかったといわれた」とも記されている。(18)

当時は，りんごの苗木を植える際に，他の作物同様，土地をよく耕起してから植え，樹間を常に中耕除草しておくという方法がとられていた。草地のまま苗木を植え，樹間にクローバーなどをまいて，刈った草で木や根を覆う方法は，革新的であったに違いない。今日では，この方法は草生法として一般化しているようであるが，もともとは小麦農場であったヒッチングズ農場で，りんごの木は傾斜地に植えられ，耕起や中耕除草が困難であったため生まれた方法かもしれない。『ルーラル・ニューヨーカー』の訪問記にも，りんごの木が斜面に植えられていること，規則的に列をつくって植えられていないことが述べられている。以上，えんどう豆とりんごの栽培について記したので，次に園芸農家における労働者雇用と生産物の販売方法について検討しよう。

IV. 園芸農場における労働と販売

ヒッチングズ農場では，最初から労働者雇用の記録があり，ホレイスの時代には半年以上の長期雇用が通例であった。ホランド・リッチが経営をまかされていた時も，住込み労働者がおり，グラントの経営になってからも長期の雇用がおこなわれた。アメリカ東部においては，いわゆる家族農

(18) *The Rural New Yorker*, September 28, 1901; November 9, 1901.

場においても，収穫や脱穀作業には雇用労働が利用されており，とくに 19 世紀後半，南北戦争後には雇用労働者を使用することが一般化した。これはアメリカ農務省が農業労働者の賃金統計を取るようになったことからも分かる。農繁期には日雇労働が多く利用されたが，ヒッチングズ農場のように常雇いの労働者を使用することも例外ではなかった。(19)

ホレイスの時代は小麦中心であるが，子供は幼いので，どうしても労働者が必要になる。ホランド・リッチの時期も，未亡人の息子たちは，まだ十分な手伝いができる年齢ではなかった。1880 年，リッチが農場から離れた時点でも，息子たちは 18 歳と 17 歳であったから，労働者の雇用は欠かせない。同年，エドワード・マクヴォイは，当初 3 月 15 日から 8 ヵ月間，月に 16 ドルで働き，契約の切れる 11 月になると，さらに 1 年間，年 155 ドルで働いた。また，ブリジット・ブランチフィールドが，やはり 3 月から家事奉公人として働いている。賃金の支払いは，契約期間の終りにまとまってなされるが，その間にも小遣いのような形で時々支払われる。エドワードの場合，5 月 19 日，サーカス，1 ドル。6 月 7 日，アン（彼の妻か妹）に 5 ドル。8 月 5 日，ピクニック，4 ドル。8 月 30 日，時計，2 ドル。9 月 23 日，フェアに行く，5 ドルなどと記録がある。ブリジットも，ピクニック，フェア，あるいはシティー（シラキュース）へ行ったとの記録があり，そうした日には「休みを取った」（Lost 1 day）と記入されているから，賃金から差引かれたのであろう。(20)

1882 年には小麦，大麦などの穀作，羊や豚の飼育，りんご栽培と多角化が進んでいるが，1 年間の常雇いが 1 人，9 ヵ月の者が 1 人，2 ヵ月の者が 2 人，2 週間の者が 1 人の他，5 月から 12 月にかけて，毎月 3 人〜16 人の日雇いが働いていた。日雇労働者の仕事には，りんごやじゃがいもの収穫もあり，日給は 1 ドルから 2 ドルであった。日雇いといっても，同じ労働者がしばしば雇われており，これらは同じ村に住んでいたものと思われる。長期雇用された者も，前記のエドワード・マクヴォイ，マイケル・フラナガン，ヘンリー・トラックなどと限られており，同姓の者が日雇いで雇われることも多い。さらに家事奉公人として，アン・マクヴォイやリビー・トラックが長期雇用されているから，いずれも近くの住民で信頼できる人間だったに違いない。

ところで，えんどう豆やいちごなどの収穫は，小麦や大麦とは異なり，すべて手作業であるが，それほどの力仕事ではない。しかし数日間ですむわけではなく，強い力はいらないものの，手間がかかる。これらの栽培に重点を移すようになったヒッチングズ農場では，それまでとは違うタイプの労働力を必要とした。ここに登場するのが，家内奉公人ではなく畑で働く女子労働力である。例えば 1896 年，アリス・クイックという女性は，6 月 19 日から 7 月 17 日までの間に 8 日間，えんどう豆といちご摘みに雇われ，日給は 40 セントから 1 ドル程度であった。摘み手の氏名と賃金について

---

(19) 岡田泰男「19 世紀アメリカ東部の家族農場と農業労働者—ニューヨーク州ロット農場，1843–1879 年」『社会経済史学』70 巻 3 号（2004 年）。

(20) Account Books, HP.

表３　日雇労働者と賃金　（1900 年 6 月）

氏名	いちご収穫量（クォート）	賃金（セント）	えんどう豆収穫量（ブッシェル）	賃金（セント）	合計賃金（セント）
Mrs. Hoffman	38	57	7/8	17	74
Pansy	37	56	5/8	13	69
Jna	29	44	1/2	10	54
Will Cook	9	14			14
Mrs. Cook	41	62	1 3/8	23	85
Makl Horton	22	33	1/4	5	38
Mrs. Nicholas	35	53	5/8	13	66
Mrs. Palmeter	35	53	2/3	13	66
Mrs. Browning	26	39	1/2	10	49
Everett Horton	14	21		6	27
Mrs. Horton	33	50	7/8	18	68
Mrs. Button	31	47		13	60
Hazel Button	21	32		6	38

出所　Hitchings Papers

日々のメモが残っているので，1900 年の 6 月のある日の記録を表 3 に例示しよう。(21)

この記録には，いちごとえんどう豆の両方がのっており，労働者は 2 種類の仕事を同じ日にこなしている。労働者の名前を見れば女性の多いことが分かるが，ミセス・ホフマンなどとあるから家庭の主婦が日雇いで働いていたことも分かる。クック，ホートン，バトン家では，一家で何人かが働いている。賃金は日給ではなく出来高払いで，ミセス・ホフマンは，いちご 38 クォート分が 57 セント，えんどう豆 7/8 ブッシェル分が 17 セント，計 74 セントとなっている。表 3 で見る限り，1 日分の賃金が 1 ドル以上になる者はいない。ただ，農場主の側からすれば，10 人程度の労働者を毎日のように集めることの方が大変であったかもしれない。女性の労働者の多くは，いわば暇の出来たときにパートタイムで働くのであって，規則的に働いたわけではない。例えば，ミセス・パーミーターの個人別勘定を見ると，前年度（1899 年）の分であるが，6 月 16 日，19 日，23 日と 3 日間しか働いておらず，賃金合計は 1 ドル 50 セント，そのうち 1 ドル 44 セント分は，いちご 24 クォートを受取り，残り 6 セントを現金で受取っている。(22)

19 世紀末頃のニューヨーク州農村で，家庭の主婦が外で働く機会はほとんどなかったものと思われる。こうした中で，えんどう豆やいちごの収穫は例外的な機会であったに違いない。戸外での農業労働とはいえ，自家の菜園での仕事と同じで，力仕事でもなかったから，女性が従事することに問題はなかった。もっとも，彼女たちが収入を得ることを目的として働いてたのかどうかは疑問である。先のミセス・パーミーターのような個人別勘定を見ると，ほとんどの主婦は現金ではなくい

(21)　Picking Records, HP.
(22)　“Mrs. Palmeter Account,” HP.

ちごを受取っている。ミセス・ダンフィーは，1900年6月17日にいちご36クォート（2ドル16セント）を受取り，同月19日，22日，25日に働いたが，賃金は2ドル8セントで足が出ている。ミセス・ニューも6月17日に同じ36クォートのいちごを受取ったが，19日と22日に働いただけなので，賃金は1ドル56セントと不足である。こうした点を見ると，彼女たちは家計の足しや小遣いかせぎというよりは，新鮮ないちごを手に入れたかったのだとも思われる。それに，他人の農場で働くといっても，ほんの数日間で，しかも報酬はいちごだということであれば，社会的な評判も落ちたりはしなかったであろう。

さて，園芸農場では収穫のための労働者雇用に心をくだかねばならなかったが，その販売にも気を配る必要があった。小麦やとうもろこしと違い，取りたてを売らねばならなかったからである。以下，ヒッチングズ農場における農産物の売却について見てみよう。

穀作が中心であったホレイスの時代，収穫された作物は，主に仲買人に売却されていたらしい。もっとも小麦や大麦を小口で売った記録もあるが，いずれにせよ農産物販売は季節的には秋から冬にかけての時期が中心である。1870年代，ホランド・リッチが経営を担い，多角化を目指すようになると，いく分変化が生ずる。1875年について見ると，4月には卵やじゃがいもの売却があり，5月に入ると豚肉が加わる。これらは卵の場合，1回の売却量が18～20ダース，じゃがいもも8～20ブッシェル，豚肉は200～250ポンドである。6月にりんご酒2樽，7月に羊毛とバター，8月に子羊とオート麦，9月以降，バターや豚肉，翌年の1，2月に小麦と大麦が売却されており，いわば1年中を通じて販売がおこなわれた。なお，売却量の1回分はバターが30～40ポンド，12月の豚肉は1,800ポンドと大量であるので，小麦や大麦（100～250ブッシェル）と同様，仲買人か食料品店に売ったものと思われる。(23)

1880年代に入って，グラントの残した日記を見ると，小麦や大麦をはじめ，豚肉やバターにしても「シティー（シラキュース）へ売りに行った」という場合が多い。農場はサウス・オノンデイガにあるが，そこの村で売るよりは，シラキュースで売る方が有利であったに違いない。1880年，すでにシラキュースは人口5万人を越える都市であり，ヒッチングズ農場から日帰りで行ける。「母とシティーへ行き，新しい服を買った」などという記入もあるので，買物にも行ったらしい。家事奉公人が休みをとってシラキュースへ行ったことは，すでに記した。ホランド・リッチの時期の記録では，売った場所がはっきりしないが，多分シラキュースへも行ったであろう。ところで，グラントは，小麦や大麦は400～800ブッシェルとまとめて売っているが，卵やバターについては，個人に対して小口で売るという方法もとった。(24)

---

(23) Account Books, HP.
(24) Diary, HP.

表 4　ショーズ夫人の勘定書

月日	品目	数量	金額（ドル）	支払い（ドル）
5月22日	バター	3 ポンド	0.75	
6月 1 日	バター	19 ポンド	4.75	
6月12日	卵	5 ダース	0.80	
	現金			2.00
6月20日	卵	2 ダース	0.30	
7月10日	バター	19 ポンド	4.75	
	卵	2 ダース	0.30	
7月16日	現金			2.50
8月 9 日	現金			2.00
8月19日	卵	2 ダース	0.30	
	えんどう豆	1 ブッシェル	1.00	
	バター	20 ポンド	5.00	
8月29日	りんご	1 袋	0.20	
9月20日	現金			1.85
10月 7 日	現金			1.00
	バター	9.5 ポンド	2.37	
10月17日	りんご	1 袋	0.15	
	りんご	0.5 袋	0.07	
10月23日	バター	7 ポンド	1.75	
11月 4 日	りんご	8.5 ブッシェル	6.37	
	合計		28.86	9.35

出所　Hitchings Papers

例えば 1884 年について見ると，この年には約 50 人分の個人別売却記録があり，バター，卵，りんご，じゃがいも，えんどう豆などを小口で売っている。バターの場合，10～20 ポンドで，2 ドルから 5 ドル程度である。客の氏名は，ミセス・ランサム，ミセス・キンボールなどとミセスのつくものが大半で，その後にグレイス街 28 番地とか，スロカム街 18 番地などと住所が記してあり，代金は，大体 1 週間くらい後に支払われている。ここで，ミセス・ショーズ（Mrs. Shouds）の勘定を表 4 として示す[(25)]。

この表から分かるように，ミセス・ショーズは，10 日に 1 度くらいずつ，バターや卵，りんご，えんどう豆などをグラントから購入している。代金は後払いであるが，その度ごとに清算されるわけではなく，2 ドル程度を時々払うという方式である。家庭の主婦にとっては，生産者である農民が，新鮮な商品を家まで持ってきてくれるわけであるので，大変好都合であったと思われる。農民の側にとっては，かなり手間のかかる方法であるが，ヒッチングズ農場くらいの規模の場合，消費者に直接販売する方が有利であったのかもしれない。もちろん，同じ 1884 年，大麦などはまとめて売っているし，バター 90～130 ポンド，りんご 100 ブッシェル，豚肉 1,400 ポンドなどの大口の売

(25)　“Mrs. Shouds Account,” HP.

却もあるから，すべてを消費者の家庭へ直接持っていったわけではない。

1890 年代に入ってからも，農産物をシラキュースへ運んで売却することは同じである。しかし，いちごやえんどう豆にも力を入れるようになったため，80 年代のように週に 1 度とか，10 日に 1 度シラキュースに行くのでは間に合わない。いちごやえんどう豆は新鮮さが命であるので，収穫すると当日か翌日には売却されることになる。6 月頃から毎日のように出荷の記録があり，運送の費用（運送する者の食事代や馬の飼料代）が記入されている。Breakfast と書かれている日もあるし，Dinner と記されている日もあるので，出発の時間はまちまちだったのかもしれない。1 日の売却量は，いちご 200〜300 クォート（20〜30 ドル），えんどう豆 10〜100 ブッシェル（10〜100 ドル）であった。8 月頃からはりんごも加わり，10〜20 ブッシェル（5〜10 ドル）が運ばれる。じゃがいもは，20〜40 ブッシェル（8〜20 ドル）が 1 回の分量である。なお，80 年代のような個人別勘定が残っていないので，掛売りはやめて現金販売にしたのかもしれないし，食料品店や市場に持っていったのかもしれない。商人との取引や市場での売却の記録は残っていないので，80 年代と同様，得意先を廻ったとも思われるが，毎日となると大変である。記録はないが，シラキュースの商人か仲買人に売却した可能性も高い。いずれにせよ，小麦を主に生産していた時代とは異なり，販売にも人手がかかるようになった。毎日，荷馬車で生産物をシラキュースへ運ぶ労働者も雇われたに相違ない。(26)

さて，このような苦心の末の収支決算はいかなるものであったか。1900 年の状況を表 5 に示す。(27)

表 5 が示すように 1900 年の収入は 2,050 ドル，支出は 1,280 ドルであり，約 770 ドルの利益があった。収入の大半を園芸作物がしめることは，すでに述べた通りである。一方，支出のうち，労賃（家事労働を除く）が，全体の約 40 パーセントをしめており，園芸農家の特殊性を示している。支出の中には食料品なども含まれているので，すべてが経営のための費用ともいえないが，ともあれ一応の利益は上がっているので，農場経営は順調であったといえよう。同年の資産は農場と林地が 6,550 ドル，家畜と農機具が約 800 ドルで，計 7,350 ドル弱である。これを資本とすれば，利益率は 10 パーセント強となる。

1870 年，グラントの父ホレイス・ヒッチングズが死亡した際，小麦を中心とする売上高は約 3,000 ドルであった。その時の資産は土地が約 18,000 ドル，家畜と農機具が約 1,000 ドルで計 19,000 ドルであった。支出は不明なので，売上高を資本で割れば粗収益率はほぼ 16 パーセントとなる。1900 年のグラントの農場の場合，同じようにして粗収益率を出せば約 28 パーセントになる。父の時代に比べ，売上高も資産額も減少したように見えるが，実質的にはより大きな利益を上げていたといえるであろう。なお，以前，19 世紀中葉のニューヨーク州セネカ郡の小麦農場について調べたことがあるが，そこでの粗収益率は 11〜13 パーセントであった。小麦農場から園芸農家への転化は，同じ

---

(26) Account Books, HP.

(27) “Inventory and Statement for 1900,” HP.

表 5　ヒッチングズ農場の収支決算書（1900 年）

収入		
品目	数量	金額（ドル）
じゃがいも	1,045（ブッシェル）	427.30
りんご	770（ブッシェル）	415.44
えんどう豆	386（ブッシェル）	338.32
いちご	4,158（クォート）	328.27
小麦	300（ブッシェル）	225.00
材木		69.34
卵	300（ダース）	42.97
薪		28.00
その他		25.11
不明*		150.00
合計		2049.75
支出		
郡税		48.80
学校税		14.95
保険		14.00
種子および苗		147.87
農業労働者賃金		387.55
家事労働者賃金		83.25
いちご収穫労賃		55.38
えんどう豆収穫労賃		81.27
鍛冶屋		21.36
食料品		188.76
諸費用		69.46
シティー諸費用		29.40
家畜農機具損耗費**		67.12
馬の飼料		71.80
合計		1280.97
利益		768.78
資産		
主農場		4000.00
メリー分の農場		1400.00
ニューマンサイド（林地）		1150.00
家畜および農機具		797.16
合計		7347.16

*　材木か　　**昨年の価値の 10 %

出所　Hitchings Papers

土地に留まる以上，賢い選択だったといえる。[28]

V. 苗木業およびニューヨーク市近郊農業

グラント・ヒッチングズは，しばしば苗木や種子を購入している。園芸農業が成立するためには，当然これらを供給する業者が必要となる。ニューヨーク州で都市近郊農業が成長するにつれ，苗木業も成長した。同州の苗木園の数は，1860年には57であったが，70年に90，80年に141，90年には530と急増した。ここで，そうした苗木屋がいかなる商売をしていたのか，ロチェスターの近くの業者の例を紹介したい。ロチェスターは，シラキュースの近くの都市で，いく分大きい。1890年，シラキュースの人口が88,000であったとき，ロチェスターは134,000であった。[29]

モンロー郡ペンフィールド（Penfield, Monroe Co.）のレイモンド兄弟（Raymond Bros.）という苗木屋の史料が残っている。モンロー郡の郷土史によれば，チャールズ（Charles），ジョージ（George），ウィリアム（William）の3兄弟は，祖父の代からのペンフィールドの住民で，農業と苗木屋を営んでいた。1870年，50エーカーの農場と苗木園を所有し，小麦，とうもろこし，オート麦，じゃがいもも生産していたが，主力は苗木生産であった。1871年2月20日の記録によれば，接ぎ木された苗木の種類と数は次の通りであった。[30]

ボールドウィン		19,825本
ノーザン・スパイ		5,650
ゴールデン・ラセット		5,725
ロックス・ラセット		3,620
その他を含め	計	38,085本

ボールドウィン以下は，すべてりんごの品種名である。3月には，さらにグリーニング種なども増え，54,110本となっている。そして3月の売上げは下記のようである。[31]

---

(28) 岡田泰男「ニューヨーク州西部農業の変化」。

(29) *U.S. Census*, Statistics of Agriculture, 1890.

(30) Raymond Family Papers, Department of Manuscript and University Archives, Cornell University.（以下RPと略記する。）; William Peck, *Landmarks of Monroe County, N.Y.* (Boston, 1895) Part III, p.167.

(31) Nursery Stock, 1871, RP.

ボールドウィン	21,515 本
グリーニング	6,595
ロックス・ラセット	3,620
スパイ	8,550

ところで，このように大量の苗木を，レイモンド兄弟はどうやって販売したのであろうか。グラント・ヒッチングズのような客がペンフィールドの苗木園に来てくれるのを待っていたのかといえば，そうではない。彼等は販売代理人を雇って地域を巡回させ，注文を取らせたのである。こうした代理人は，次のような，いわば身分証明書を持っていた。(32)

代理人証明書　　1873 年 5 月 26 日

M.S. カミングズ氏は当社の代理人たることを証明する。御注文を受けた苗木，花，種子などを，適当な時期に配達致します。

ニューヨーク州ペンフィールド

苗木商　レイモンド兄弟

代理人は注文書を持って地域を廻ることになるが，その注文書に印刷された品目を見ると，レイモンド兄弟が，きわめて多くの種類の苗木を栽培していたことが分かる。書き出せば次の通りである。すなわち，りんご（Standard Apples），小粒りんご（Crab Apples），矮性りんご（Dwarf Apples），ペアー，マルメロ，チェリー，プラム，アプリコット，ネクタリン，ピーチ，ブラックベリー，ラズベリー，カラント，いちご，ぶどう，とねりこ，とちの木，柳，とうひ，もみの木，ヨーロッパ黒松，アメリカひのき，シベリヤひのき，バラ各種，潅木各種，以上である。果樹のみではなく，とねりこ以下の樹木や，バラの苗も扱っていたわけである。したがって苗木屋の客は園芸農家ばかりでなく，庭に植える木や草花を求める町の住民もいたのであろう。代理人の残した注文帖（Order Book）や，レイモンド宛の書簡やメモから，そうした客の姿もうかがうことができる。注文書の一例をあげよう。(33)

1872 年 7 月 16 日　ダンカーク

ニューヨーク州ペンフィールドのレイモンド兄弟に，下記の苗木を注文。ダンカークに配達し，代金は到着払い。もし注文した品種がない場合，同様に良質なものに代替可とする。

---

(32)　“Certificate of agency,” RP.

(33)　Order Book, RP.

ノーザン・スパイ	2本	0.50（ドル）
ボールドウィン	2	0.50
グリーニング	2	0.50
トゥエンティ・オンス	2	0.50
ロックス・ラセット	2	0.50
ブラック・チェリー	1	0.75
ナポレオン・チェリー	1	0.75
バートレット・ペアー（矮性）	1	0.50
バートレット・ペアー（普通）	1	1.00
エッグ・プラム	1	0.75
	合計	6.75

ジェイコブ・フェリンジャー

住所　ミドル・ロードを約1マイルの所。

注記　1873年春に配達のこと。

ジェイコブ・フェリンジャーは注文主であるが，代理人はこうした注文を取って廻ったのであろう。この時の注文帖を見ると，代理人は，7月10日から7月22日までの間に，49件の注文を取っており，1件あたり1ドルから10ドル，場所はダンカーク，シェリダン，ウォーターフォードなど，ニューヨーク州西部の町々である。フェリンジャーの住んでいたダンカークは，ぶどうの産地としても有名で，注文の中には，コンコードやデラウェアといったぶどうの苗木も入っているが，注文の量からして，果樹園ではなく，一般の家庭が主な顧客であったろう。バラと柳を75セント分注文したミセス・ロットとか，同じくバラと柳を3ドル分注文したホイットマン・クラークなど，注文の内容から園芸農家とは考えられない。ヒッチングズの場合を見ると，本格的にりんごの生産を始めた時期には，100本とか200本とかの苗木を植えているのであって，ほんの数本ずつ注文することなどありえなかった。

客の中には，いささか面倒な客もいて，代理人を悩ませた。例えば1872年7月17日，2種類のプラムを注文したダンカークのジョン・クロフトンは，配達した際，引取らなかったので，他の客に廻した。注文帖には「良い苗木だ。リューマチ持ちのけちな奴」とメモしてある。また，1873年12月25日，ドイツ・プラムやバートレット・ペアーを注文したサーモンド夫人は「代わりの品種は受取らない」といったので，「特別に注意を払って，良い苗木を配達したが，代金を支払わなかった」とのことであった。さらに，同じ日，12ドル75セント分の苗木を注文したブルーマンの場合，

「もし来年3月までに引越さなかったならば」という条件がついており，注文帖に×印がつけてある。さらに，ウィリアム・ピッチャーという代理人がレイモンドにあてた書簡には，ポスト氏という客が，枯れてしまったペアー2本，りんご4本，生け垣200本分の代わりの苗木を要求しているとの通知がある。園芸農家や，家に樹木や花を植えようとする町の住民が増えたおかげで，苗木屋の商売は繁盛したであろうが，それほど気楽な仕事ではなかったことが推察される。(34)

ところで，ヒッチングズ農場では，いちごやえんどう豆を，自分でシラキュースへ売却に行っていたが，すべての園芸農家がこうした方法をとっていたわけではない。むしろ他の農産物と同様，代理商に依頼して市場へ出荷する方が普通であったろう。最後にニューヨーク市近郊のアルスター（Ulster）で果物を生産していたオリヴァー・ティルスン（Oliver J. Tillson）の場合を検討する。ティルスン農場はニューパルツ（New Paltz）にあるが，ここはハドソン川沿いのポーキプシー（Poughkeepsie）から西へ10マイルほどで，ニューヨーク市とは鉄道と船の便がある。ポーキプシーからニューヨーク市までの距離は65マイルである。ニューヨーク市への出荷は容易であるが，ヒッチングズのように馬車で運べるほど近くはない。都市近郊農場としては，ティルスンの場合の方が一般的であろう。(35)

ティルスン農場は176エーカーあり，1858年にオリヴァーが父親から譲られたもので，すでにその年，果物，じゃがいも，きゅうり，ラディッシュ，メロンなどの売上げが160ドルほどあるから，最初から園芸農家の色合が濃い。長期雇用（数ヶ月から1年）の労働者が毎年2，3名雇われていること，いちごの収穫などには，日雇いで出来高払いの労働者（女性が多い）が，1日20名から30名くらい雇われている点など，ヒッチングズ農場に類似している。以下においては生産物の販売という面に焦点をあてて見てゆきたい。なお，ティルスン農場の方が，ヒッチングズ農場よりいく分規模が大きく，そのことは売上高などからも分かる。ただし，比較にならぬ程大きいというわけではない。(36)

ティルスンが，ニューヨーク市の代理商と取引を始めたのは，1862年からであって，同年6月18日付の，ニューヨーク市バークレイ街99番地のハイト商会からの勘定書が最初の記録である。ハイト商会は，「国内産果物，バター，卵，鶏肉等」を扱っていた。この勘定書は6月14日，17日の分で，いちご計7箱（crate）計658ポンド，ポンドあたり3〜3.5セントで，計22ドル76セント，それから運賃1ドル98セントと手数料2ドル28セントを差引き，18ドル50セントがティルスンの手取りとなる。手数料は売上高の10パーセントである。同年，6月から8月半ばまで，ほぼ毎日

---

(34) Order Book; Letter, William Pitcher to Raymond, April 18, 1877, RP.

(35) Oliver J. Tillson Papers, Department of Manuscripts and University Archives, Cornell University. (以下TPと略記する)。

(36) Farm Account Book, TP.

のように，いちご，ラズベリー，グズベリー，カラント，ペアーなどを出荷し，ハイト商会を通じての売上高は計 241 ドル 16 セントであった。なお，やはりバークレイ街 103 番地のロリンズ商会とも 2 回ほど取引しているが，21 ドル 94 セントと金額は少ない。バークレイ街は，マンハッタンの南端に近いハドソン川側の通りで，食料品や果物を扱う問屋が多かったのであろう(37)。

果物類は木箱に入れて送られるが，いちごなどは，先ずバスケットにつめ，それを木箱に入れて送った。一つの箱に 100 くらいのバスケットを入れるのが普通で，1 箱は 50 から 100 ポンド前後になった。アルスター郡にはこうした運送用の容器製造業者があり，ティルスンは，そこから木箱などを購入した。いく分後の 1880 年代になるが，「ホイットニー・バスケット製造会社，果物用バスケット，カップ，ケース，木箱等製造」という業者から，5,200 箱，計 220 ドルを購入している。また，「すべての果物用容器製造，特製ぶどう用バスケット」をかかげるフォークト・スピネンウェーバー社とも取引があった。こうした専門業者の存在は，この地域での園芸農業の盛んな様子を示している(38)。

1863 年にはキング・デイ商会，トムスン・ブラウン商会に，いちご，さくらんぼ，りんごなどを出荷しているが，6 月半ばから 8 月半ばにかけて，ほとんど毎日 100〜500 バスケットを送り出した。バスケットあたりのいちごの価格は，6 月には 7〜9 セント，7 月から 8 月に入ると 3〜5 セントに下がった。ピーチ，りんご，ぶどうなどは 9 月から 10 月にかけて出荷された。ところで，ティルスンの出荷するいちごには問題があった。この点を 1864 年に取引を始めたヤング商会からの書簡が指摘している。同年 7 月 16 日付けで，次のように記してある(39)。

> そろそろいちごつみの時期も終りと思いますが，一言申し上げます。あなたの農園のいちごつみ労働者は，バスケットに一杯にいちごをつめてこないので，売れゆきが芳しくありません。その点を除けば問題はないのですが，当方のお客の一流の食料品店の主人が，バスケットに一杯でないと苦情をいっています。

ヤング商会からは，翌 65 年の 6 月，いちごつみの最盛期を迎えようとする頃に，もう一度，同じ趣旨の注意がきている(40)。

> いちごのつめ方について御注意申し上げます。いちごのバスケットは一杯につめること，とく

---

(37) Accounts, TP. ニューヨーク市の問屋街については次に述べた。岡田泰男「アメリカ東部の農村商人—19 世紀中葉ニューヨーク州の例」『三田学会雑誌』97 巻 2 号（2004 年）。
(38) Accounts, TP.
(39) Letter, J. W. Young to O. Tillson, July 16, 1864, TP.
(40) Letter, J. W. Young to O. Tillson, June 26, 1865, TP.

に最上段はきっちりつめて，運ぶ途中にゆれて見栄えが悪くならぬようにすることが，あなたにもお得になります。今朝の分は，最上段が一杯でなく，バスケットも小さめのため，売れるのが最後になりました。今日は出荷が多かったため，近くの問屋でも値を下げ，（バスケットあたり）10から15セントでしたが，一杯につまったものが高く売れます。あなたの果物が良い値で売れるようにと思い，つめ方に気を配っていただくよう申し上げます。

こんな風に，小売店の側の好みを生産者に伝えることも，問屋や代理商の役割であったに違いない。小麦やとうもろこしとは異なり，いちごのような果物は，収穫から出荷まで細心の注意が必要であった。ティルスンは，こうした点を学びつつ，生産を拡大していったのであろう。1870年代の半頃になると，いちご，ぶどう，ペアーなどからの収入（手取り額）は，4,000ドル近くになっている。さらに1880年代に入ると，ニューヨークだけでなくボストン，フィラデルフィア，バッファローの代理商とも取引するようになった。とくにボストンのライス・ホルウェイ商会との取引が多いが，これはボストンの方がニューヨークよりも，いく分高めに売れたためであろう。例えば，1888年7月中旬，いちご1カップの売り値は，ニューヨークでは3～4セント，ボストンでは5～6セント，9月中旬のぶどう1ポンドの値段は，ニューヨークで2.5～3.5セント，ボストンでは4～5セントであった。運賃はボストンの方がかかったが，手取り額ではニューヨークより有利だった。手数料はいずれも10パーセントである。(41)

また，1880年代にはイギリスへの輸出もおこなった。リヴァプールの商人からの，アメリカおよびカナダ産のりんごの市況についての報告もあるが，直接取引するわけではなく，ニューヨークの商人を通じて輸出する。例えば1888年秋にりんごを輸出した際には，ニューヨークのジョン・エリス商会が仲介した。同商会はリヴァプールのウッドオール社と，ロンドンのエドワード・ジェイコブ社の代理人で，りんご100樽を，ワイオミング号に積んで送った。ボールドウィン種のりんごであったが，イギリスでの評価はなかなか細かく，100樽のうち30樽は問題なく，1樽13シリングだが，35樽はつめ方がゆるいので9シリング6ペンス，26樽は少々水ぬれで7シリング6ペンスといった具合である。ほかに見本用とか，樽のふたがあいてしまったものなどもあり，売上げ額は49ポンド4シリングである。ここから，船賃13ポンド2シリング6ペンス，諸経費（荷揚げ，選別，保管，広告，売却手間賃等）3ポンド2シリング6ペンス，海上保険料4シリング，仲買手数料（5パーセント）2ポンド9シリング3セントを差引くと，結局30ポンド5シリング9ペンスとなる。これを電信為替で送金すると，また手数料がかかり，ニューヨークには30ポンド（144ドル90セント）が送られた。ここからニューヨーク商人の手数料20ドルが差引かれ，ティルスンの手取りは124ドル90セントということになる。輸出については，ティルスンはあまり熱心ではなかった

---

(41) Accounts, TP.

ようだが，これは手取りに比して諸費用がかかりすぎたせいかもしれない。もっとも，前年の1887年についてのアメリカ農務省の報告を見ると，同年アメリカ産りんごの輸出量は59万樽（138万ドル），乾りんご813万ポンド（41万ドル）に上っているので，果物の輸出も珍しいことではなかったに違いない[42]。

アメリカ東部，とくにニューヨーク市やボストン近郊の園芸農家の場合，ヒッチングズのように自分で収穫物を売り歩くよりは，都市の代理商に委託する方が一般的であったに違いない。しかし，収穫期に毎日出荷する点では同じであるし，バスケットや樽へのつめ方にも気をつかわねばならぬとすると，ヒッチングズのやり方の方が気楽であったかもしれない。もっとも，ヒッチングズにしても食料品店へ売ることもあったから，園芸農家が収穫から出荷の段階に至るまで，十分に心を配らなければならなかった点は同一である。こうした苦労の結果，ヒッチングズが一応の利益を上げていたことは述べたが，ティルスンも十分に満足できる暮しをしていた。

19世紀末にはアメリカ各地で郷土史が出版されたが，その中に地元の名士として伝記をのせてもらうためには，当然料金を支払わねばならなかった。したがって郷土史を読んで貧しい農民の暮らしを知ることなどできないが，成功した農民のプロフィールはうかがえる。1880年に『アルスター郡の歴史』が出版されたとき，ティルスンは150ドル支払って，伝記と肖像をのせてもらっているので，彼が成功した農民であったことは確かであろう。しかし，そうした記述よりも，もっと具体的に彼の暮らしを伝える史料がある。それは1894年，彼の家に温水暖房装置を取り付けたときの工事屋の見積り書と勘定書である。

ティルスンの家は2階建てで，地下室があった。1階は大広間，応接間，客間，図書室，書斎があり，最初の4室は90～120平方フィートの広さ，2階は4寝室と浴室があり，広い方の寝室は60～75平方フィート，子供用の2寝室は各25平方フィート，地下には地下室と食堂があった。地下の食堂というのは台所兼用であろう。これらすべてに暖房をつけ，外の気温が零度のとき，室内は華氏70度に保つとすると，工事費は550ドルという見積りであった。これは，さすがに高すぎたのであろう。結局，下の客間，食堂，広間と，2階の寝室と浴室に暖房器をとりつけることにして，費用は285ドルであった。せっかく暖房設備が付いたのに，ティルスンが翌1895年に死去してしまったのは気の毒である[43]。

---

(42) Letter, John Ellis and Co. to O. Tillson, October 4, 1888, TP; U.S.D.A. *Annual Report*, 1887, pp.574–8.

(43) Nathaniel Sylvester, *History of Ulster County, N.Y.* (Philadelphia, 1880), p.133; Letter, P. C. Doherty to O. Tillson, October 25, 1984; December 1, 1984; January 26, 1895, TP.

まとめ

1907年に出版された『アメリカ農業百科事典』の中の「アメリカの農業地域」を見ると，ニューヨーク州のオンタリオ湖沿いは，りんご生産地帯（Apple belt）となっている。19世紀中葉には，ニューヨーク西部は小麦地帯であったから，半世紀の間に，この地域の農業が大きく変貌したことが分かる。同じニューヨーク州でも，より南東部のニューヨーク市に近い地域では，農業の変化はもう少し早くから始まっていた。例えば1860年に出版されたフレンチの『ニューヨーク州地誌』において，ティルスンの農場のあったアルスター郡では「果物生産が重要になりつつある」と記されている[44]。

以前「西漸運動と東部農村」という論文の中で，次のように述べたことがある。19世紀ニューヨーク州の農民にとって，西部へ移住するか，東部に留まり都市市場向けの農業に転換するかという二つの道があった。西部への移住は，それまでの穀物生産を続けるものであり，後者は新しい市場を開拓するもので，園芸農業や酪農業がそれにあたる。ただ後者には資本の必要など，いろいろ難点もあった，というわけである[45]。本稿では後者の道を選択した農民をとり上げたが，単に資本の必要というよりは，新しい作物を生産するにあたっての，いろいろな工夫や，労働者雇用，生産物の販売にも多くの苦労があったことを述べた。グラント・ヒッチングズは討論会で，「東部の農民は古いやり方に執着し，パパのやっていたことを真似」ると主張したが，自身は古いやり方に執着せず，むしろ革新的な農業経営をおこなった。また，オリヴァー・ティルスンも，海外をも含めて新しい市場の開拓に努めた。

アメリカ東部農村のイメージは，どうしても停滞的あるいは保守的ということであろう。近年の研究は，東部農村のいわゆる市場革命期の姿を明らかにしつつあるが，19世紀後半に関しては，旧来のイメージは変化していない。新たな発展というと，人はどうしても都市や西部のフロンティアを思い浮かべてしまう。しかし，最近ではフロンティアの保守的な面が指摘されているのであり，それとは逆に，東部農村にも革新的な要素があったことを主張したい[46]。

（名誉教授）

（44） L. H. Bailey, ed., *Cyclopedia of American Agriculture* (N.Y., 1907) Vol. 1, pp.41–43; J. H. French, *Gazetteer of the State of New York* (Syracuse, 1860), p.661.

（45） 岡田泰男「西漸運動と東部農村」『三田学会雑誌』73巻3号（1980），岡田泰男『フロンティアと開拓者』（東京大学出版会，1994年）に所収。

（46） Hal S. Barron, Those Who Stayed Behind (N.Y., 1984); 岡田泰男「フロンティアの経済史的意義」岡田泰男・須藤功編『アメリカ経済史の新潮流』（慶應義塾大学出版会，2003年）に所収。